

# テータ関数の変換公式

宮崎 直\*

## 1 はじめに

### 1.1 序文

本稿の目的は, 新谷氏の論文 [Shn] に沿って, テータ関数の変換公式 (一般化された Poisson 和公式) を解説する事である. §2 で Weil 表現からテータ関数の変換公式が導出される過程について説明し, §3 でテータ関数を  $SL(2, \mathbf{R}) \times SO(p, q)$  の被覆群に制限した場合についての具体的な計算を紹介する. §3 での計算は, 保型形式のテータリフトの 1 種である織田リフトにおいて重要な役割を果たす. 織田リフトについての詳細は, 菅野氏による解説 [Su] を参照されたい.

本稿のおおまかな流れは [Shn] に従っているが, Heisenberg 群や Weil 表現の定義は現在よく使われているものに変更した. また, 本稿を書くにあたっては, [Ta] を参考にさせて頂いた.

### 1.2 記号について

$z \in \mathbf{C}$  に対して,  $e[z] = \exp(2\pi\sqrt{-1}z)$  とおき,  $\sqrt{z} = z^{\frac{1}{2}}$  を  $-\frac{\pi}{2} < \arg z^{\frac{1}{2}} \leq \frac{\pi}{2}$  となるようにとる. さらに,  $k \in \mathbf{Z}$  に対して,  $z^{\frac{k}{2}} = (z^{\frac{1}{2}})^k$  とおく.  $t \in \mathbf{R}^\times$  に対して,  $\operatorname{sgn} t = t/|t|$  とおく. 絶対値 1 の複素数のなす乗法群を  $\mathbf{C}^1 = \{z \in \mathbf{C}^\times \mid |z| = 1\}$  と表記する.

$\mathbf{R}$  上の有限次元ベクトル空間  $V$  に対して,  $V$  上の急減少関数のなす空間を  $\mathcal{S}(V)$ , 滑らかな関数のなす空間を  $C^\infty(V)$ , 2 乗可積分関数のなす空間を  $L^2(V)$  と表記する. また, 正の整数  $m$  に対して,  $\mathbf{R}^m$  の元は行ベクトルとして扱うものとする.

## 2 テータ関数の変換公式

### 2.1 Heisenberg 群

$W$  を  $\mathbf{R}$  上の  $2n$  次元ベクトル空間とし,  $\langle, \rangle$  を  $W$  上の非退化交代形式とする.  $W = X \oplus X^*$  を  $W$  の偏極 (つまり,  $X, X^*$  は  $\langle X, X \rangle = \langle X^*, X^* \rangle = 0$ ,  $\dim_{\mathbf{R}} X = \dim_{\mathbf{R}} X^* = n$ ,  $W = X \oplus X^*$ )

---

\*Department of Mathematics, Rikkyo University, Nishi-Ikebukuro, Tokyo 171-8501, Japan  
miyaza@ms.u-tokyo.ac.jp

をみたく  $W$  の部分空間) とし, 固定しておく. 以下,  $W$  の元  $w$  が  $w = x + x^*$  ( $x \in X, x^* \in X^*$ ) と分解されるとき,  $w = x \oplus x^*$  と表記する事にする.

$X$  の基底  $\{e_1, e_2, \dots, e_n\}$  と  $X^*$  の基底  $\{e_1^*, e_2^*, \dots, e_n^*\}$  を  $\langle e_i, e_j^* \rangle = \delta_{i,j}$  となるようにとる.  $X$  上の座標を  $x = \sum_{i=1}^n x_i e_i$  ( $x_i \in \mathbf{R}$ ) で定めて,  $X$  上の測度  $dx$  を  $dx = \prod_{i=1}^n dx_i$  で定義する. また,  $X^*$  上の座標を  $x^* = \sum_{i=1}^n x_i^* e_i^*$  ( $x_i^* \in \mathbf{R}$ ) で定めて,  $X^*$  上の測度  $d^*x^*$  を  $d^*x^* = \prod_{i=1}^n dx_i^*$  で定義する. ここで,  $dx_i, dx_i^*$  は  $\mathbf{R}$  上の通常の Lebesgue 測度であるとする. このとき,  $f \in \mathcal{S}(X)$  に対して, Fourier 変換を

$$\hat{f}(x^*) = \int_X f(x) e[-\langle x, x^* \rangle] dx \quad (x^* \in X^*)$$

で定義し,  $f \in \mathcal{S}(X^*)$  に対して, 逆 Fourier 変換を

$$\check{f}(x) = \int_{X^*} f(x^*) e[\langle x, x^* \rangle] d^*x^* \quad (x \in X)$$

で定義すると, Fourier 反転公式  $\check{\hat{f}} = f$  が任意の  $f \in \mathcal{S}(X)$  で成立する.

集合  $H(W) = W \times \mathbf{R}$  に演算を

$$(w, t) \cdot (w', t') = \left( w + w', t + t' + \frac{1}{2} \langle w, w' \rangle \right) \quad (w, w' \in W, t, t' \in \mathbf{R})$$

で定める事で定義される群を Heisenberg 群という. このとき,  $H(W)$  の中心は  $Z(H(W)) = \{(0, t) \in H(W) \mid t \in \mathbf{R}\} \simeq \mathbf{R}$  である.

任意の  $r \in \mathbf{R}^\times$  に対して,  $H(W)$  の  $L^2(X)$  上のユニタリ表現  $U_r$  を

$$U_r(h)f(y) = e \left[ r \left( t + \frac{1}{2} \langle x, x^* \rangle + \langle y, x^* \rangle \right) \right] f(y + x) \\ (h = (x \oplus x^*, t) \in H(W), f \in L^2(X))$$

によって定義する. Heisenberg 群の表現を扱う上では, 次の3つの定理は基本的である.

**定理 2.1.** 任意の  $r \in \mathbf{R}^\times$  に対して,  $(U_r, L^2(X))$  は  $H(W)$  の既約ユニタリ表現である.

**定理 2.2** (Stone-von Neumann の定理).  $r \in \mathbf{R}^\times$  とする.  $H(W)$  の既約ユニタリ表現  $(\Pi, V_\Pi)$  が  $\Pi(0, t) = e[rt]$  ( $t \in \mathbf{R}$ ) をみたくするとき,  $(\Pi, V_\Pi)$  は  $(U_r, L^2(X))$  とユニタリ同値である.

**定理 2.3** (Schur の補題).  $(\Pi, V_\Pi), (\Pi', V_{\Pi'})$  を  $H(W)$  の既約ユニタリ表現とする. このとき,  $(\Pi, V_\Pi)$  から  $(\Pi', V_{\Pi'})$  への連続  $H(W)$ -準同型写像全体のなす空間は高々1次元である.

今後,  $U_1$  を  $U$  と略記する事にする.

## 2.2 $\mathbf{R}$ 上での Weil 表現

この節では,  $\mathbf{R}$  上での Weil 表現について復習する. 詳しくは, 松本氏による解説 [Ma] を参照されたい.

$Sp(W)$  を  $W$  上の斜交群, すなわち,

$$Sp(W) = \{\sigma \in GL(W) \mid \langle w\sigma, w'\sigma \rangle = \langle w, w' \rangle \ (\forall w, w' \in W)\}$$

とする. ここで,  $GL(W)$  は  $W$  に右から作用しているものとする.  $Sp(W)$  の  $H(W)$  への右作用を

$$h^\sigma = (w\sigma, t) \quad (h = (w, t) \in H(W), \sigma \in Sp(W))$$

で定義しておく.

$L^2(X)$  のユニタリ自己同型写像  $T$  全体のなす群  $\text{Aut}(L^2(X))$  は全ての  $f \in L^2(X)$  に対して  $T \mapsto Tf$  が連続となる最弱の位相に関して Hausdorff 位相群になる.  $Mp(W)$  を

$$U(h^\sigma) = T^{-1} \circ U(h) \circ T \quad (\forall h \in H(W)) \quad (2.1)$$

をみたく  $(\sigma, T)$  のなす  $Sp(W) \times \text{Aut}(L^2(X))$  の部分群とすると,  $Mp(W)$  は部分位相によって局所 compact な Hausdorff 位相群となる. ここで, Stone-von Neumann の定理より, 射影  $Mp(W) \ni (\sigma, T) \mapsto \sigma \in Sp(W)$  は全射である事に注意しておく.

$Mp(W)$  の部分群として,  $Sp(W)$  の 2 重被覆群を構成しよう. そのために少し準備をする.  $\sigma \in Sp(W)$  に対して,

$$w\sigma = (xa + x^*c) \oplus (xb + x^*d) \quad (\forall w = x \oplus x^* \in W)$$

によって定まる  $a \in \text{End}_{\mathbf{R}}(X)$ ,  $b \in \text{Hom}_{\mathbf{R}}(X, X^*)$ ,  $c \in \text{Hom}_{\mathbf{R}}(X^*, X)$ ,  $d \in \text{End}_{\mathbf{R}}(X^*)$  をとり,  $\sigma = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix}$  と行列表示する. また,  $c \in \text{Hom}_{\mathbf{R}}(X^*, X)$  に対して,  $\det^* c = \det(\langle e_i^*c, e_j^* \rangle)_{i,j=1,\dots,n}$  と定義する.

$\det^* c \neq 0$  となる  $\sigma = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \in Sp(W)$  に対して,  $r_0(\sigma) \in \text{Aut}(L^2(X))$  を

$$(r_0(\sigma)f)(x) = |\det^* c|^{\frac{1}{2}} \int_{X^*} \mathbf{e} \left[ \frac{1}{2} \langle xa + x^*c, xb + x^*d \rangle - \frac{1}{2} \langle x, x^* \rangle \right] f(xa + x^*c) d^*x^* \quad (f \in \mathcal{S}(X))$$

を連続に拡張したものとして定義する. このとき,  $r(\sigma) = (\sigma, r_0(\sigma)) \in Mp(W)$  であり, 次の (1), (2) をみたく連続群準同型写像  $\Psi: Mp(W) \rightarrow \mathbf{C}^1$  が唯 1 つ存在する:

$$(1) \ \Psi(1, t) = t^2 \quad (\forall t \in \mathbf{C}^1),$$

$$(2) \ \Psi(r(\sigma)) = (\sqrt{-1})^n \frac{\det^* c}{|\det^* c|} \left( \forall \sigma = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \in Sp(W) \text{ s.t. } \det^* c \neq 0 \right).$$

ここで,  $\widetilde{Sp}(W) = \text{Ker } \Psi$  とおくと, 連続群準同型写像

$$\varpi: \widetilde{Sp}(W) \ni (\sigma, T) \mapsto \sigma \in Sp(W)$$

は全射で  $\text{Ker } \varpi = \{(1, \pm 1)\}$  であり,  $\widetilde{Sp}(W)$  は  $Sp(W)$  の非自明な 2 重被覆群になっている. このとき,  $\widetilde{Sp}(W)$  の  $L^2(X)$  上のユニタリ表現が

$$\omega: \widetilde{Sp}(W) \ni (\sigma, T) \mapsto T \in \text{Aut}(L^2(X))$$

により定義される. このユニタリ表現  $(\omega, L^2(X))$  を Weil 表現という.

$\Psi$  の性質 (1), (2) と Schur の補題より,  $\varpi(\tilde{\sigma}) = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix}$  ( $\det^* c \neq 0$ ) となる  $\tilde{\sigma} \in \widetilde{Sp}(W)$

に対して, ある複素数  $\epsilon_\omega(\tilde{\sigma})$  が存在して,  $\{\epsilon_\omega(\tilde{\sigma})\}^2 = \left( (\sqrt{-1})^n \frac{\det^* c}{|\det^* c|} \right)^{-1}$  かつ  $\omega(\tilde{\sigma}) = \epsilon_\omega(\tilde{\sigma}) r_0(\varpi(\tilde{\sigma}))$  が成立する.

### 2.3 誘導表現

$L$  と  $L'$  をそれぞれ  $X$  と  $X^*$  の  $\mathbf{Z}$ -格子とし,  $\psi: \Lambda \rightarrow \mathbf{C}^\times$  を  $H(W)$  の部分群  $\Lambda = (L \oplus L') \times \mathbf{R}$  のユニタリ指標とする. ここで,  $\psi$  から誘導される  $H(W)$  のユニタリ表現  $(\rho_\psi, I_\Lambda(\psi))$  を定義しよう. 表現空間  $I_\Lambda(\psi)$  を

$$I_\Lambda(\psi)^\infty = \{ \theta \in C^\infty(H(W)) \mid \theta(\lambda h) = \psi(\lambda) \theta(h) \ (\forall \lambda \in \Lambda) \}$$

を内積

$$\begin{aligned} \langle \theta_1, \theta_2 \rangle_\Lambda &= \int_{\Lambda \backslash H(W)} \theta_1(h) \overline{\theta_2(h)} dh \\ &= \frac{1}{\text{vol}(X^*/L')} \int_{(X/L) \times (X^*/L')} \theta_1(x \oplus x^*, 0) \overline{\theta_2(x \oplus x^*, 0)} dx dx^* \end{aligned} \quad (2.2)$$

について完備化した Hilbert 空間とし,  $H(W)$  の作用を右移動

$$\rho_\psi(h) \theta(z) = \theta(zh) \quad (h \in H(W), \theta \in I_\Lambda(\psi))$$

で定める. ここで,  $\text{vol}(X^*/L') = \int_{X^*/L'} d^* x^*$  とし,  $dh$  は (2.2) の 2 つめの等号が成立するような  $\Lambda \backslash H(W)$  上の右  $H(W)$  不変測度とする. この  $dh$  の正規化の仕方は少し不自然だが, この後の議論をする上で都合が良い.

$X$  の  $\mathbf{Z}$ -格子  $L$  に対して,  $L$  の  $\langle, \rangle$  に関する双対格子  $L^* = \{ l^* \in X^* \mid \langle l, l^* \rangle \in \mathbf{Z} \ (\forall l \in L) \}$  をとる.  $M^*$  を  $L^*$  の部分格子とし,  $M^*$  の  $\langle, \rangle$  に関する双対格子  $M = \{ l \in X \mid \langle l, l^* \rangle \in \mathbf{Z} \ (\forall l^* \in M^*) \}$  をとる. つまり,

$$\begin{array}{ccccccc} L & \subset & M & \cdots & X \text{ の } \mathbf{Z}\text{-格子} \\ \uparrow \text{双対} & & \uparrow \text{双対} & & \\ L^* & \supset & M^* & \cdots & X^* \text{ の } \mathbf{Z}\text{-格子} \end{array}$$

とする． $\Lambda_0 = (L \oplus L^*) \times \mathbf{R}$ ,  $\Lambda_1 = (L \oplus M^*) \times \mathbf{R} \subset H(W)$  とおく． $\Lambda_1$  のユニタリ指標  $\chi: \Lambda_1 \rightarrow \mathbf{C}^\times$  を

$$\chi(\lambda) = \mathbf{e} \left[ t + \frac{1}{2} \langle l, l^* \rangle \right] \quad (\lambda = (l \oplus l^*, t) \in \Lambda_1)$$

で定義する． $\mu \in M/L$  に対して， $\Lambda_0$  のユニタリ指標  $\chi_\mu: \Lambda_0 \rightarrow \mathbf{C}^\times$  を

$$\chi_\mu(\lambda) = \mathbf{e} \left[ t + \frac{1}{2} \langle l, l^* \rangle + \langle \mu, l^* \rangle \right] \quad (\lambda = (l \oplus l^*, t) \in \Lambda_0)$$

で定義する．このとき， $\chi_\mu|_{\Lambda_1} = \chi$  だから  $I_{\Lambda_0}(\chi_\mu)$  は  $I_{\Lambda_1}(\chi)$  の  $H(W)$ -不変な閉部分空間であり，簡単な議論によって，

$$I_{\Lambda_1}(\chi) = \bigoplus_{\mu \in M/L} I_{\Lambda_0}(\chi_\mu) \quad (2.3)$$

と分解される事が分かる．実際， $\theta \in I_{\Lambda_1}(\chi)$  に対して， $\theta^\mu \in I_{\Lambda_0}(\chi_\mu)$  を

$$\theta^\mu(h) = \frac{1}{\#(M/L)} \sum_{\lambda \in \Lambda_1 \setminus \Lambda_0} \chi_\mu(\lambda)^{-1} \theta(\lambda h)$$

で定義すると， $\theta = \sum_{\mu \in M/L} \theta^\mu$  が成立する．ここで， $\#(M/L)$  は  $M/L$  の位数を表す．

命題 2.4. 以下が成立する:

(1)  $I_{\Lambda_1}(\chi)$  の分解 (2.3) は内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle_{\Lambda_1}$  に関する直交分解である．

(2)  $\mu \in M/L$  と  $f \in \mathcal{S}(X)$  に対して， $\Theta_{\chi_\mu}(f) \in I_{\Lambda_0}(\chi_\mu)$  を

$$\Theta_{\chi_\mu}(f)(h) = \sum_{l \in L} \mathbf{e} \left[ t + \frac{1}{2} \langle x, x^* \rangle + \langle \mu + l, x^* \rangle \right] f(x + \mu + l) \quad (h = (x \oplus x^*, t) \in H(W))$$

で定義する．このとき， $\Theta_{\chi_\mu}$  を連続に拡張して  $L^2(X)$  から  $I_{\Lambda_0}(\chi_\mu)$  へのユニタリ  $H(W)$ -同型写像が得られる．

(3)  $\nu \in M/L$  と  $\theta \in I_{\Lambda_1}(\chi)^\infty$  に対して， $F_{\chi_\nu}(\theta) \in L^2(X)$  を

$$F_{\chi_\nu}(\theta)(x) = \frac{1}{\text{vol}(X^*/M^*)} \int_{X^*/M^*} \theta((x - \nu) \oplus x^*, 0) \mathbf{e} \left[ -\frac{1}{2} \langle x + \nu, x^* \rangle \right] d^* x^* \quad (x \in X)$$

で定義する．このとき， $F_{\chi_\nu}$  を連続に拡張して  $(\rho_\chi, I_{\Lambda_1}(\chi))$  から  $(U, L^2(X))$  への連続  $H(W)$ -準同型写像が得られる．

(4) (2),(3) で定義した  $\Theta_{\chi_\mu}$  と  $F_{\chi_\nu}$  に対して，

$$F_{\chi_\nu} \circ \Theta_{\chi_\nu} = \text{id}_{L^2(X)}, \quad F_{\chi_\nu} \circ \Theta_{\chi_\mu} = 0 \quad (\nu \neq \mu)$$

が成立する．

この命題は Fourier 級数展開の理論と指標の直交性を用いれば，直接計算によって確かめる事ができる．分解 (2.3) において， $\langle \cdot, \cdot \rangle_{\Lambda_1}$  を各  $I_{\Lambda_0}(\chi_\mu)$  に制限して得られる内積は， $\langle \cdot, \cdot \rangle_{\Lambda_0}$  と一致する．また，この命題と Schur の補題より， $(U, L^2(X))$  から  $(\rho_\chi, I_{\Lambda_1}(\chi))$  への連続  $H(W)$ -準同型写像は  $\Theta_{\chi_\mu}$  達の線型結合で表せる事に注意しておこう．

## 2.4 テータ関数の変換公式

$Sp(L \oplus M^*)$  を

$$(L \oplus M^*)\gamma = L \oplus M^*, \quad \chi(\lambda^\gamma) = \chi(\lambda) \quad (\forall \lambda \in \Lambda_1)$$

をみたく  $\gamma \in Sp(W)$  のなす  $Sp(W)$  の部分群とし、 $\widetilde{Sp}(L \oplus M^*) = \varpi^{-1}(Sp(L \oplus M^*))$  とおく。また、 $\mu \in M/L$  と  $f \in \mathcal{S}(X)$  に対して、 $\widetilde{Sp}(W)$  上のテータ関数  $\vartheta_f(\tilde{\sigma}; \mu)$  を

$$\vartheta_f(\tilde{\sigma}; \mu) = \Theta_{\chi\mu}(\omega(\tilde{\sigma})f)(0, 0) = \sum_{l \in L} (\omega(\tilde{\sigma})f)(x + \mu + l)$$

で定義する。

**定理 2.5 (テータ関数の変換公式).**  $\tilde{\gamma} \in \widetilde{Sp}(L \oplus M^*)$  と  $\mu \in M/L$  に対して、

$$\vartheta_f(\tilde{\gamma}\tilde{\sigma}; \mu) = \sum_{\nu \in M/L} C_{\tilde{\gamma}}(\mu, \nu) \vartheta_f(\tilde{\sigma}; \nu) \quad (\forall f \in \mathcal{S}(X)) \quad (2.4)$$

が成立するような複素数  $C_{\tilde{\gamma}}(\mu, \nu)$  ( $\nu \in M/L$ ) が存在する。

$M/L = \{\mu_1, \mu_2, \dots, \mu_N\}$  ( $N = \#(M/L)$ ) とおくと、行列  $C_{\tilde{\gamma}} = (C_{\tilde{\gamma}}(\mu_i, \mu_j))_{i,j=1,\dots,N}$  はユニタリ行列であり、 $C_{\tilde{\gamma}_1\tilde{\gamma}_2} = C_{\tilde{\gamma}_1}C_{\tilde{\gamma}_2}$  ( $\forall \tilde{\gamma}_1, \tilde{\gamma}_2 \in \widetilde{Sp}(L \oplus M^*)$ ) が成立する。

さらに、 $\varpi(\tilde{\gamma}) = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix}$  と表すと  $\det^* c \neq 0$  となるとき、 $C_{\tilde{\gamma}}(\mu, \nu)$  は、

$$C_{\tilde{\gamma}}(\mu, \nu) = \frac{\epsilon_\omega(\tilde{\gamma}) |\det^* c|^{-\frac{1}{2}}}{\text{vol}(X^*/M^*)} \sum_{l \in L/M^*c^*} e \left[ \frac{1}{2} \langle \mu + l, (\mu + l)ac^{-1} \rangle - \langle \mu + l, \nu c^{-1} \rangle + \frac{1}{2} \langle \nu, \nu c^{-1}d \rangle \right] \quad (2.5)$$

で与えられる。ここで、 $c^*$  は  $\langle x_1^*c, x_2^* \rangle = \langle x_2^*c^*, x_1^* \rangle$  ( $\forall x_1^*, x_2^* \in X^*$ ) で定まる  $\text{Hom}_{\mathbf{R}}(X^*, X)$  の元とする。

**証明.** 群準同型写像  $Sp(L \oplus M^*) \ni \gamma \mapsto \Xi_\gamma \in \text{Aut}(I_{\Lambda_1}(\chi))$  を  $(\Xi_\gamma\theta)(h) = \theta(h^\gamma)$  ( $\theta \in I_{\Lambda_1}(\chi)$ ) で定義すると、 $\Xi_\gamma \circ \rho_\chi(h^\gamma) = \rho_\chi(h) \circ \Xi_\gamma$  ( $\forall h \in H(W)$ ) が成立する。よって、 $\tilde{\gamma} \in \widetilde{Sp}(L \oplus M^*)$  に対して、 $\gamma = \varpi(\tilde{\gamma})$  とおくと、 $\Xi_{\gamma^{-1}} \circ \Theta_{\chi\mu} \circ \omega(\tilde{\gamma})$  は  $(U, L^2(X))$  から  $(\rho_\chi, I_{\Lambda_1}(\chi))$  へのユニタリ  $H(W)$ -準同型写像になる。よって、ある複素数  $C_{\tilde{\gamma}}(\mu, \nu)$  ( $\nu \in M/L$ ) が存在して、

$$\Xi_{\gamma^{-1}} \circ \Theta_{\chi\mu} \circ \omega(\tilde{\gamma}) = \sum_{\nu \in M/L} C_{\tilde{\gamma}}(\mu, \nu) \Theta_{\chi\nu} \quad (2.6)$$

が成立する。この両辺による  $\omega(\tilde{\sigma})f$  ( $\tilde{\sigma} \in \widetilde{Sp}(W)$ ,  $f \in \mathcal{S}(X)$ ) の像を考え、 $(0, 0) \in H(W)$  で値をとると (2.4) が得られる。

また、 $\tilde{\gamma}_1, \tilde{\gamma}_2 \in \widetilde{Sp}(L \oplus M^*)$  に対して、 $\gamma_1 = \varpi(\tilde{\gamma}_1)$ ,  $\gamma_2 = \varpi(\tilde{\gamma}_2)$  とおくと、

$$\Xi_{(\gamma_1\gamma_2)^{-1}} \circ \Theta_{\chi\mu_i} \circ \omega(\tilde{\gamma}_1\tilde{\gamma}_2) = \Xi_{\gamma_2^{-1}} \circ (\Xi_{\gamma_1^{-1}} \circ \Theta_{\chi\mu_i} \circ \omega(\tilde{\gamma}_1)) \circ \omega(\tilde{\gamma}_2) \quad (i = 1, 2, \dots, N)$$

となる．この両辺に (2.6) を用いると，左辺は  $\sum_{j=1}^N C_{\tilde{\gamma}_1 \tilde{\gamma}_2}(\mu_i, \mu_j) \Theta_{\chi_{\mu_j}}$  となり，右辺は

$$\begin{aligned} \Xi_{\tilde{\gamma}_2^{-1}} \circ \left( \sum_{k=1}^N C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu_i, \mu_k) \Theta_{\chi_{\mu_k}} \right) \circ \omega(\tilde{\gamma}_2) &= \sum_{k=1}^N C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu_i, \mu_k) \left( \sum_{j=1}^N C_{\tilde{\gamma}_2}(\mu_k, \mu_j) \Theta_{\chi_{\mu_j}} \right) \\ &= \sum_{j=1}^N \left( \sum_{k=1}^N C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu_i, \mu_k) C_{\tilde{\gamma}_2}(\mu_k, \mu_j) \right) \Theta_{\chi_{\mu_j}} \end{aligned}$$

となるから， $C_{\tilde{\gamma}_1 \tilde{\gamma}_2}(\mu_i, \mu_j) = \sum_{k=1}^N C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu_i, \mu_k) C_{\tilde{\gamma}_2}(\mu_k, \mu_j)$  を得る．これより， $C_{\tilde{\gamma}_1 \tilde{\gamma}_2} = C_{\tilde{\gamma}_1} C_{\tilde{\gamma}_2}$  が得られる．

$L^2$ -ノルムの値が 1 であるような  $f \in \mathcal{S}(X)$  をとり，

$$\mathbf{V}_f = \bigoplus_{i=1}^N \mathbf{C} \Theta_{\chi_{\mu_i}}(f) \subset I_{\Lambda_1}(\chi)$$

とおくと， $C_{\tilde{\gamma}}$  は  $\mathbf{V}_f$  上の 2 種類の正規直交基底  $\{\Xi_{\gamma^{-1}} \Theta_{\chi_{\mu_i}}(\omega(\tilde{\gamma})f)\}_{i=1}^N$  と  $\{\Theta_{\chi_{\mu_i}}(f)\}_{i=1}^N$  の変換行列であるから，ユニタリ行列である．

最後に (2.5) を示す．(2.6) の両辺による  $\omega(\tilde{\gamma}^{-1})f$  ( $f \in \mathcal{S}(X)$ ) の像を考えると，

$$\Xi_{\gamma^{-1}} \Theta_{\chi_{\mu}}(f) = \sum_{\nu \in M/L} C_{\tilde{\gamma}}(\mu, \nu) \Theta_{\chi_{\nu}}(\omega(\tilde{\gamma}^{-1})f)$$

となる．さらに命題 2.4(4) より，

$$F_{\chi_{\nu}}(\Xi_{\gamma^{-1}} \Theta_{\chi_{\mu}}(f)) = C_{\tilde{\gamma}}(\mu, \nu) \omega(\tilde{\gamma}^{-1})f. \quad (2.7)$$

この両辺を定義に基づいて計算して比較する事で，(2.5) が得られる．  $\square$

### 3 $\widetilde{SL}(2, \mathbf{R}) \times SO(Q)$ 上でのテータ級数の変換公式

#### 3.1 簡約双対ペア $(SL(2, \mathbf{R}), O(Q))$

まず， $J = \begin{pmatrix} & 1 \\ -1 & \end{pmatrix} \in SL(2, \mathbf{R})$  とおき， $\mathbf{R}^2$  上の非退化交代形式  $\langle \cdot, \cdot \rangle_J$  を  $\langle r, r' \rangle_J = rJ^t r'$  ( $r, r' \in \mathbf{R}^2$ ) で定義する．このとき， $\sigma \in SL(2, \mathbf{R})$  に対して，

$$\langle r\sigma, r'\sigma \rangle_J = \langle r, r' \rangle_J \quad (\sigma \in SL(2, \mathbf{R}))$$

が成立する．また， $Q \in M_n(\mathbf{Q})$  を符号  $(p, q)$  の非退化な対称行列，つまり，ある  $g_Q \in GL(n, \mathbf{Q})$  が存在して  $Q = g_Q \begin{pmatrix} 1_p & \\ & -1_q \end{pmatrix} {}^t g_Q$  が成立するものとし， $p > 0$  と仮定する． $\mathbf{R}^n$  上に非退化対称形式  $(\cdot, \cdot)_Q$  を  $(x, x')_Q = xQ^t x'$  ( $x, x' \in \mathbf{R}^n$ ) で定義し， $(\cdot, \cdot)_Q$  に関する直交群  $O(Q)$  を

$$O(Q) = \{g \in GL(n, \mathbf{R}) \mid (xg, x'g)_Q = (x, x')_Q \ (\forall x, x' \in \mathbf{R}^n)\}$$

$$= \{g \in GL(n, \mathbf{R}) \mid gQ^t g = Q\}$$

で定義する .

基本的に , この章では前章と同じ記号を用いるが ,  $W, \langle, \rangle, X, X^*, e_i, e_i^*$  は次のように具体的に取る .  $W = \mathbf{R}^n \otimes_{\mathbf{R}} \mathbf{R}^2$  とし ,  $W$  上の非退化交代形式  $\langle, \rangle$  を

$$\langle x \otimes r, x' \otimes r' \rangle = (x, x')_Q \langle r, r' \rangle_J \quad (x \otimes r, x' \otimes r' \in W)$$

で定義する .  $W$  の偏極  $W = X \oplus X^*$  を

$$X = \mathbf{R}^n \otimes_{\mathbf{R}} (1, 0), \quad X^* = \mathbf{R}^n \otimes_{\mathbf{R}} (0, 1).$$

として固定し ,  $\mathbf{R}$  上のベクトル空間としての同型写像

$$X \ni x \otimes (1, 0) \mapsto x \in \mathbf{R}^n, \quad X^* \ni x \otimes (0, 1) \mapsto x \in \mathbf{R}^n$$

によって  $X, X^*$  を共に  $\mathbf{R}^n$  と同一視する . この同一視の下で ,  $X$  の基底  $\{e_1, e_2, \dots, e_n\}$  は  $\mathbf{R}^n$  の標準基底 (つまり ,  $e_i$  は第  $i$  成分が 1 で他の成分が 0 である  $\mathbf{R}^n$  の元) とし ,  $X^*$  の基底  $\{e_1^*, e_2^*, \dots, e_n^*\}$  を  $e_i^* = e_i Q^{-1}$  によって定める . このとき ,  $dx$  は  $\mathbf{R}^n$  上の通常の Lebesgue 測度であり ,  $d^*x = |\det Q| dx$  となる .  $L^2(X)$  上の Weil 表現は  $Q$  のとり方に依存して決まるため , 今後 ,  $\omega(\tilde{\sigma}), r_0(\sigma)$  をそれぞれ  $\omega(\tilde{\sigma}, Q), r_0(\sigma, Q)$  と書く事にする .

$SL(2, \mathbf{R})$  と  $O(Q)$  は , それぞれ

$$\begin{aligned} (x \otimes r)\sigma &= x \otimes (r\sigma) & (x \otimes r \in W, \sigma \in SL(2, \mathbf{R})), \\ (x \otimes r)g &= (xg) \otimes r & (x \otimes r \in W, g \in O(Q)) \end{aligned}$$

によって定まる  $W$  への作用によって  $Sp(W)$  の部分群と見なせる . このとき ,  $(SL(2, \mathbf{R}), O(Q))$  は  $Sp(W)$  に含まれる簡約双対ペア , すなわち ,

$$\begin{aligned} SL(2, \mathbf{R}) &= \{\sigma \in Sp(W) \mid \sigma g = g\sigma \ (\forall g \in O(Q))\}, \\ O(Q) &= \{g \in Sp(W) \mid \sigma g = g\sigma \ (\forall \sigma \in SL(2, \mathbf{R}))\} \end{aligned}$$

をみたす . ここで ,  $SO(Q) = SL(n, \mathbf{R}) \cap O(Q)$  とおく . この章の目標は ,  $\varpi^{-1}(SL(2, \mathbf{R}))$  と  $\varpi^{-1}(SO(Q))$  の構造を明らかにする事と , テータ関数  $\vartheta_f(\tilde{\sigma}; \mu)$  を  $SL(2, \mathbf{R})SO(Q) (\subset Sp(W))$  の被覆群に制限した場合についてテータ関数の変換公式をより具体的な形に書き下す事である .

**注意 3.1.** 本稿では , 簡単のためにテータ関数  $\vartheta_f(\tilde{\sigma}; \mu)$  を  $SL(2, \mathbf{R})SO(Q)$  の被覆群に制限した場合について考えるが , テータリフトの一般論に従うならば  $SL(2, \mathbf{R})O(Q)$  の被覆群に制限した場合について考えるべきである .



### 3.2 準備

$X, X^*$  と  $\mathbf{R}^n$  の同一視によつて,  $\text{End}_{\mathbf{R}}(X), \text{Hom}_{\mathbf{R}}(X, X^*), \text{Hom}_{\mathbf{R}}(X^*, X), \text{End}_{\mathbf{R}}(X^*)$  を全て  $M_n(\mathbf{R})$  と同一視する. これにより,  $\sigma = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in SL(2, \mathbf{R})$  と  $g \in O(Q)$  の  $Sp(W)$  の元としての行列表示はそれぞれ

$$\begin{bmatrix} a1_n & b1_n \\ c1_n & d1_n \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} g & O_n \\ O_n & g \end{bmatrix}$$

となる. また,  $c \in M_n(\mathbf{R})$  に対して,  $\det^* c = (\det Q)^{-1} \det c$  となる. これを踏まえると,  $c \neq 0$  となる  $\sigma = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in SL(2, \mathbf{R})$  と  $f \in \mathcal{S}(X)$  に対して,

$$(r_0(\sigma, Q)f)(x) = |c|^{-\frac{n}{2}} \sqrt{|\det Q|} \int_{\mathbf{R}^n} e^{\left[ \frac{a(x, x)_Q - 2(x, y)_Q + d(y, y)_Q}{2c} \right]} f(y) dy$$

となる事が簡単な変数変換によって分かる. また,  $\sigma = \begin{pmatrix} a & b \\ 0 & d \end{pmatrix} \in SL(2, \mathbf{R})$  と  $g \in O(Q)$  に対して,  $r_0(\sigma, Q)$  と  $r_0(g, Q)$  を

$$r_0(\sigma, Q) = r_0(\sigma J, Q) r_0(J^{-1}, Q), \quad r_0(g, Q) = r_0(gJ, Q) r_0(J^{-1}, Q)$$

で定義すると, Fourier 反転公式より,  $f \in \mathcal{S}(X)$  に対して,

$$(r_0(\sigma, Q)f)(x) = |a|^{\frac{n}{2}} e^{\left[ \frac{ab}{2}(x, x)_Q \right]} f(xa), \quad (r_0(g, Q)f)(x) = f(xg)$$

となる.

一般線型群  $GL(n, \mathbf{R})$  の  $L^2(X)$  への作用  $R$  を

$$(R(g)f)(x) = \sqrt{|\det g|} f(xg) \quad (g \in GL(n, \mathbf{R}), f \in L^2(X))$$

で定義する. このとき,  $r_0(g, Q) = R(g)$  ( $\forall g \in O(Q)$ ) が成立する. また,  $\sigma \in SL(2, \mathbf{R})$  に対して, 上記の  $r_0(\sigma, Q)$  の作用の式より,

$$r_0(\sigma, gQ^t g) R(g) = R(g) r_0(\sigma, Q) \quad (g \in GL(n, \mathbf{R})) \quad (3.1)$$

が成立する事も分かる.

### 3.3 $\varpi^{-1}(SL(2, \mathbf{R}))$ と $\varpi^{-1}(SO(Q))$ の構造

まず,  $\varpi^{-1}(SL(2, \mathbf{R}))$  の明示的な記述を与えよう. そのために, 少し準備をする. 複素上半平面を  $\mathfrak{H} = \{z = u + \sqrt{-1}v \mid u, v \in \mathbf{R}, v > 0\}$  と書く.  $\sigma = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in SL(2, \mathbf{R})$  と  $z \in \mathfrak{H}$

に対して,

$$j(\sigma, z) = cz + d, \quad \sigma(z) = \frac{az + b}{cz + d}, \quad \epsilon(\sigma) = \begin{cases} (\sqrt{-1})^{\frac{1}{2}} & (c > 0 \text{ のとき}), \\ (\sqrt{-1})^{\frac{1-\text{sgn}(d)}{2}} & (c = 0 \text{ のとき}), \\ (\sqrt{-1})^{-\frac{1}{2}} & (c < 0 \text{ のとき}). \end{cases}$$

と定義しておく.  $Q = g_Q \begin{pmatrix} 1_p & \\ & -1_q \end{pmatrix} {}^t g_Q$  となるような  $g_Q \in GL(n, \mathbf{R})$  をとり, 正定値対称行列  $R$  を  $R = g_Q {}^t g_Q$  で定義する.  $z = u + \sqrt{-1}v \in \mathfrak{H}$  に対して,  $Q_z = uQ + \sqrt{-1}vR$  とおく. 0 以上の整数  $k$  に対して,  $P_k(x)$  を次のような表示を持つ  $X$  上の  $k$  次同次多項式とする:

$$\begin{cases} 1 & k = 0 \text{ のとき}, \\ rQ {}^t x & (r \in \mathbf{C}^n \text{ s.t. } r(Q - R) = 0) & k = 1 \text{ のとき}, \\ \sum_r c_r (rQ {}^t x)^k & (c_r \in \mathbf{C}, r \in \mathbf{C}^n \text{ s.t. } r(Q - R) = 0, rQ {}^t r = 0) & k \geq 2 \text{ のとき}. \end{cases} \quad (3.2)$$

(ただし,  $p = 1$  のときは  $k \leq 1$  と仮定する.)

**補題 3.2.**  $F_z(x) = e \left[ \frac{1}{2} x Q_z {}^t x \right] P_k(x) \in \mathcal{S}(X)$  とおく. このとき,

$$r_0(\sigma, Q) F_z(x) = \epsilon(\sigma)^{p-q} j(\sigma, z)^{\frac{q-p}{2}-k} |j(\sigma, z)|^{-q} F_{\sigma(z)}(x)$$

が任意の  $\sigma \in SL(2, \mathbf{R})$  に対して成立する.

**証明.**  $g \in GL(n, \mathbf{R})$  に対して,  $R(g)F_z(x)$  は (3.2) の形の表示を持つある  $k$  次同次多項式  $P'_k(x)$  を用いて,  $R(g)F_z(x) = e \left[ \frac{1}{2} x (gQ {}^t g)_z {}^t x \right] \sqrt{|\det g|} P'_k(x)$  と表せる. よって, (3.1) より,  $Q = \begin{pmatrix} 1_p & \\ & -1_q \end{pmatrix}$ ,  $R = 1_n$  と仮定して良い.

$\sigma = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$  とおく.  $c = 0$  のときは, §3.2 の  $r_0(\sigma, Q)$  の作用の式より, 直ちに主張が得られる. また,  $c \neq 0$  のときは §3.2 の  $r_0(\sigma, Q)$  の作用の式より,

$$\begin{aligned} & |c|^{-\frac{n}{2}} \int_{\mathbf{R}^n} e \left[ \frac{a(x, x)_Q - 2(x, y)_Q + d(y, y)_Q}{2c} \right] F_z(y) dy \\ &= |c|^{-\frac{n}{2}} (v - \sqrt{-1}u - \sqrt{-1}d/c)^{-\frac{p}{2}} (v + \sqrt{-1}u + \sqrt{-1}d/c)^{-\frac{q}{2}} j(\sigma, z)^{-k} F_{\sigma(z)}(x) \end{aligned} \quad (3.3)$$

を示せば良い事が分かる.  $k = 0$  のときは (3.3) の左辺を変数変換し, さらに Cauchy の積分定理によって積分路を変える事により, (3.3) の証明はよく知られた公式

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-\pi t^2} dt = 1$$

に帰着される.  $k > 0$  での (3.3) は,  $k = 0$  での (3.3) の両辺に

$$\frac{1}{(2\pi\sqrt{-1})^k (az + b)^k} P_k \left( \frac{\partial}{\partial x_1}, \frac{\partial}{\partial x_2}, \dots, \frac{\partial}{\partial x_n} \right) \quad (x = (x_1, x_2, \dots, x_n) \text{ とする})$$

を作用させる事で得られる. (左辺の計算では, 部分積分を用いる.) □

$c \neq 0$  である  $\sigma = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in SL(2, \mathbf{R})$  に対して,  $\{\epsilon(\sigma)^{p-q}\}^2 = (\sqrt{-1})^n \frac{\det^*(c1_n)}{|\det^*(c1_n)|}$  であるから,  $\Psi$  の性質 (1),(2) より,  $(\sigma, \epsilon(\sigma)^{q-p}r_0(\sigma, Q)) \in \widetilde{Sp}(W) = \text{Ker } \Psi$  となる事が分かる.  
 また, Schur の補題より,  $\sigma, \tau \in SL(2, \mathbf{R})$  に対して,

$$(\epsilon(\sigma)^{q-p}r_0(\sigma, Q)) \circ (\epsilon(\tau)^{q-p}r_0(\tau, Q)) = c(\sigma, \tau)\epsilon(\sigma\tau)^{q-p}r_0(\sigma\tau, Q)$$

となる定数  $c(\sigma, \tau)$  が存在する. このとき, 上の補題より,

$$c(\sigma, \tau) = \left\{ \frac{j(\sigma\tau, \sqrt{-1})^{\frac{1}{2}}}{j(\sigma, \tau\langle\sqrt{-1}\rangle)^{\frac{1}{2}}j(\tau, \sqrt{-1})^{\frac{1}{2}}} \right\}^{p-q}$$

となる事が分かる.

以上により, 次の命題が得られた.

**命題 3.3.** 半直積  $SL(2, \mathbf{R}) \times \{\pm 1\}$  に群演算を

$$(\sigma, t) \cdot (\sigma', t') = (\sigma\sigma', tt'c(\sigma, \sigma')) \quad ((\sigma, t), (\sigma', t') \in SL(2, \mathbf{R}) \times \{\pm 1\})$$

で定義する. ( $n$  が偶数のときは, 普通の直積になる.) このとき,

$$\iota_1: SL(2, \mathbf{R}) \times \{\pm 1\} \ni (\sigma, t) \mapsto (\sigma, t\epsilon(\sigma)^{q-p}r_0(\sigma, Q)) \in \widetilde{SL}(2, \mathbf{R})$$

は群同型写像になる.

次に,  $\varpi^{-1}(SO(Q))$  について考える.  $\Psi$  の性質 (2) より,  $g \in O(Q)$  に対して,

$$\begin{aligned} \Psi(g, r_0(g, Q)) &= \Psi(gJ, r_0(gJ, Q))\Psi(J^{-1}, r_0(J^{-1}, Q)) \\ &= \left\{ (\sqrt{-1})^n \frac{\det^*(-g)}{|\det^*(-g)|} \right\} \left\{ (\sqrt{-1})^n \frac{\det^*1_n}{|\det^*1_n|} \right\} = \det g \end{aligned}$$

が成立する. これより, 次の命題が得られる.

**命題 3.4.**  $g \in SO(Q)$  に対して,  $(g, r_0(g, Q)) \in \widetilde{Sp}(W) = \text{Ker } \Psi$  が成立する. また, 群準同型写像

$$\iota_2: SO(Q) \ni g \mapsto (g, r_0(g, Q)) \in \widetilde{Sp}(W)$$

は被覆写像  $\varpi: \widetilde{Sp}(W) \rightarrow Sp(W)$  の  $SO(Q)$  上での切断である.

**注意 3.5.** 上の計算から分かるように, 被覆写像  $\varpi$  は  $SO(Q)$  上では自明であるが,  $O(Q)$  上では自明でない.

### 3.4 テータ関数の変換公式

$L$  を  $\mathbf{R}^n$  の  $\mathbf{Z}$ -格子,  $L^* = \{l' \in \mathbf{R}^n \mid (l, l')_Q \in \mathbf{Z} \ (\forall l \in L)\}$  をその双対格子とし,  $L^* \supset L$  であると仮定する. 今,  $X, X^*$  を共に  $\mathbf{R}^n$  と同一視しているため,  $L$  は前章での  $L$  と  $M^*$ ,  $L^*$  は前章での  $L^*$  と  $M$  にあたる  $\mathbf{Z}$ -格子であると解釈できる.  $f \in \mathcal{S}(X)$  と  $\mu \in L^*/L$  に対して,

$$\vartheta_f(\tilde{\sigma}, g; \mu) = \sum_{l \in L} \omega(\iota_1(\tilde{\sigma})\iota_2(g))f(\mu + l) \quad (\tilde{\sigma} \in \widetilde{SL}(2, \mathbf{R}), g \in SO(Q))$$

と定義する. このとき, 定理 2.5 と若干の計算により次が得られる:

定理 3.6. (1)  $\gamma_2 \in SO(Q) \cap GL(n, \mathbf{Z})$  に対して,

$$\vartheta_f(\tilde{\sigma}, \gamma_2 g; \mu) = \vartheta_f(\tilde{\sigma}, g; \mu \gamma_2).$$

(2)  $\gamma_1 = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in SL(2, \mathbf{Z})$  が  $ab(l, l)_Q \equiv cd(l, l)_Q \equiv 0 \pmod{2} \ (\forall l \in L)$  をみたすとする. このとき,  $\tilde{\gamma}_1 = (\gamma_1, \varepsilon) \in \widetilde{SL}(2, \mathbf{R})$  に対して,

$$\vartheta_f(\tilde{\gamma}_1 \tilde{\sigma}, g; \mu) = \sum_{\nu \in L^*/L} C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu, \nu) \vartheta_f(\tilde{\sigma}, g; \nu)$$

が  $\forall f \in \mathcal{S}(X)$  で成立する. ここで,  $C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu, \nu)$  は以下で与えられる定数である:

$$C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu, \nu) = \begin{cases} \frac{\varepsilon(\sqrt{-1})^{(q-p)\frac{\text{sgn } c}{2}}}{|c|^{\frac{n}{2}} \sqrt{|\det Q|} \text{vol}(\mathbf{R}^n/L)} \sum_{l \in L/cL} e^{\left[ \frac{a(\mu+l, \mu+l)_Q - 2(\mu+l, \nu)_Q + d(\nu, \nu)_Q}{2c} \right]} & (c \neq 0 \text{ のとき}), \\ \varepsilon \delta_{\mu, \nu} (\sqrt{-1})^{(q-p)\frac{1-\text{sgn } d}{2}} e^{\left[ \frac{ab}{2}(\mu, \mu)_Q \right]} & (c = 0 \text{ のとき}). \end{cases}$$

ここで,  $\delta_{\mu, \mu'} = \begin{cases} 1 & (\mu = \mu' \text{ のとき}), \\ 0 & (\mu \neq \mu' \text{ のとき}) \end{cases}$  とする.

さらに計算を行う事で, 次のような  $C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu, \nu)$  の表示が得られる:

系 3.7.  $L$  の  $\mathbf{Z}$ -基底  $\{l_1, l_2, \dots, l_n\}$  をとり,  $D = \det((l_i, l_j)_Q)$  とおく. 定理 3.6(ii) で, さらに  $c \in 2\mathbf{Z}$ ,  $cL^* \subset L$ ,  $cd \neq 0$ ,  $c(l, l)_Q \equiv 0 \pmod{2} \ (\forall l \in L^*)$  と仮定すると,

$$\varepsilon(\sqrt{-1})^{(p-q)\frac{1-\text{sgn } d}{2} \text{sgn } c} C_{\tilde{\gamma}_1}(\mu, \nu) = \begin{cases} \delta_{\mu, \nu} e^{\left[ \frac{ab}{2}(\mu, \nu)_Q \right]} \varepsilon_d^{-n} (\sqrt{-1} \text{sgn } c)^n \left( \frac{2c}{d} \right)^n \left( \frac{D}{-d} \right) & (d < 0 \text{ のとき}), \\ \delta_{\mu, \nu} e^{\left[ \frac{ab}{2}(\mu, \nu)_Q \right]} \varepsilon_d^n \left( \frac{-2c}{d} \right)^n \left( \frac{D}{d} \right) & (d > 0 \text{ のとき}) \end{cases}$$

が成立する. ここで,  $\varepsilon_d = \begin{cases} 1 & (d \equiv 1 \pmod{4} \text{ のとき}), \\ \sqrt{-1} & (d \equiv 3 \pmod{4} \text{ のとき}) \end{cases}$  とし,  $\left( \frac{\cdot}{\cdot} \right)$  は志村氏が定義した平方剰余記号 ([Shm] 参照) とする.

### 3.5 $\mathfrak{h} \times SO(Q)$ 上のテータ関数

最後に, §3.4 の結果を新谷氏の原論文 [Shn] にある形に書き直しておこう.  
 $\widetilde{SL}(2, \mathbf{R})$  の極大コンパクト部分群  $\widetilde{SO}(2)$  を

$$\widetilde{SO}(2) = \{(\kappa_t, \varepsilon) \mid t \in \mathbf{R}, \varepsilon \in \{\pm 1\}\}$$

で定義する. ここで,  $\kappa_t = \begin{pmatrix} \cos t & \sin t \\ -\sin t & \cos t \end{pmatrix} \in SO(2)$  とする. また,  $z = u + \sqrt{-1}v \in \mathfrak{h}$

に対して,  $\tilde{\sigma}_z = \left( \begin{pmatrix} \sqrt{v} & u/\sqrt{v} \\ & 1/\sqrt{v} \end{pmatrix}, 1 \right)$  とおく.

整数  $m$  と  $f \in \mathcal{S}(X)$  を

$$\omega(t_1(\kappa_t, \varepsilon))f = \varepsilon(e^{-\sqrt{-1}t})^{-\frac{m}{2}} f \quad (\forall (\kappa_t, \varepsilon) \in \widetilde{SO}(2)) \quad (3.4)$$

をみたすをみたすようにとり,  $\mu \in L^*/L$  をとる. (例えば,  $m = p - q + 2k$  と  $f = F_z$  は (3.4) をみたす.) このとき,  $\mathfrak{h} \times SO(Q)$  上のテータ関数  $\theta_f^{\mathfrak{h}}(z, g; \mu)$  を

$$\theta_f^{\mathfrak{h}}(z, g; \mu) = v^{-\frac{m}{2}} \theta_f(\tilde{\sigma}_z, {}^t g^{-1}; \mu)$$

で定義する.

系 3.8.  $\gamma_2 \in SO(Q) \cap GL(n, \mathbf{Z})$  と定理 3.6 (2) の仮定をみたす  $\gamma_1 \in SL(2, \mathbf{Z})$  に対して,

$$j(\gamma_1, z)^{-\frac{m}{2}} \theta_f^{\mathfrak{h}}(\gamma_1 z, \gamma_2 g; \mu) = \sum_{\nu \in L^*/L} C_{(\gamma_1, 1)}(\mu, \nu) \theta_f^{\mathfrak{h}}(z, g; \nu {}^t \gamma_2^{-1})$$

が成立する.

### 参考文献

[Ma] 松本久義. Weil 表現と Howe duality. (本報告集)

[Shm] Goro Shimura. On modular forms of half integral weight. *Ann. of Math.* 97, pp. 440–481, 1973.

[Shn] Takuro Shintani. On construction of holomorphic cusp forms of half integral weight. *Nagoya Math. J.*, Vol. 58, pp. 83–126, 1975.

[Su] 菅野孝史. Oda lift. (本報告集)

[Ta] 高瀬幸一. Weil 表現と古典的 theta 級数. 第 4 回整数論サマースクール報告集, pp. 44–62, 1996.